横浜市立末吉小学校
学校だより
令和8年 5月号

末吉小だより

「いただきます」の向こう側にあるもの

校　長　　髙山　和宣

五月二日は「八十八夜」です。「夏も近づく八十八夜……」という茶摘みの歌を耳にすることも少なくなりましたが、この日は古くから農作業の大切な節目とされてきました。

「米」という漢字を分解すると「八十八」になります。これは、お米が実るまでに「八十八回もの手間がかかる」という意味が込められていると言われています。

私たちが当たり前のように食べているお米一粒一粒には、苗作りから田植え、水の管理、そして収穫にいたるまで、数えきれないほどの時間と汗が注がれているのです。

手間がかかっているのは、田んぼや畑だけではありません。収穫された食べ物を袋に詰め、トラックで運び、お店に並べる人々。そして、それらを「安全でおいしく、安心して食べられるように」と、アレルギーや衛生に気を配りながら調理する人々。今、目の前にある食事は、実に多くのバトンがつながって届いた「贈り物」なのです。

同時に、私たちは野菜や魚、肉といった「元々あった命」をいただいて自分の命を繋いでいます。「いただきます」という言葉は、関わった人々への感謝であると同時に、尊い命への敬意でもあります。

末吉小学校の給食は、年間 188 回あります。私たちはこの時間を、単にお腹を満たすだけの時間ではなく、大切な「学習の時間」と考えています。

「食」を入り口に目を向ければ、世界が見えてきます。気象の変化で作物がどう育つのか。地域の特産品と気候の関係。魚の減少や環境問題。世界の貧困やフェアトレードの問題。

給食の一皿から、環境、経済、文化、そして命の尊厳まで、子どもたちの思考を広げていきたいと願っています。

子どもたちが給食を美味しそうに頬張る姿は、学校の宝物の一つです。食材を育てる人、運ぶ人、お店の人。そして何より、毎日心を込めて給食を作る栄養教諭や調理員さん、ご家庭で食事を準備してくださる保護者の皆様。

たくさんの「手」と「命」に支えられていることを知り、心からの「ありがとう」が言える。そんな優しく、たくましい末吉の子を、ご家庭・地域と共に育ていきたいと考えています。